

東日本大震災に遭遇して その1 震源最短距離の金華山で三度の命拾い

1. 恐怖の大地震

2011年3月11日、私は震源地に最も近い島・金華山で東日本大震災に遭遇した。私が所属する山歩きの会のメンバー13名は金華山への山登りを終えて午後2時過ぎ棧橋付近に到着した。午前中に島に到着した時には、かもめや鹿が餌をねだってたくさん近寄って来てきたが、その時には全く姿がなかった。だが、さほど気にも留めなかった。待合室で3時発の鮎川行きの最終便を待っていると、船が棧橋に近づくのが見えた。すでに2人ほど棧橋に出ている。自分もそろそろ席を立とうと思ってリュックを背負った瞬間、急にテーブルがガタガタと音を立てながら左右に揺れ始めた。「地震だ!」と言う声が聞こえ、出入り口付近にいた仲間はずっと戸を開けて外へ飛び出した。2時46分、それがマグニチュード9.0の大地震の始まりである。

奥にいた私は大地震になるとは夢にも思わず、反射的にテーブルの下にもぐり込み、両手両膝をついた。すると周りのガタガターという音に混じって、コンクリートの床下からゴゴゴゴ、グォン、グォーンという不気味な音が続けざまに聞こえて来た。こんな音を聞くのは生まれて初めてだった。まるで地獄の底から聞こえてくるように思えた。揺れが急激に大きくなった。震源地が近い。もしかして、予測されている巨大地震かもしれない。これは恐ろしいことになるぞと直感して体がこわばり、息が荒くなった。突っ張っている腕や太ももに大きな震動が伝わってくる。体全体が前後に大きく振れた。金属屋根が激しく震動するガガガガという金属音、スレート壁と鉄骨が猛烈にぶつかるガタガタガターという音、鉄柱がきしむギーギーという音が入り混じった轟音が建物全体に響き渡った。揺れはますます大きくなってゆく。身を守っているテーブルが激しく移動するので、2本の脚を両手でつかんだ。それでも動くので、動きに合わせて自分も動かざるを得ない。陳列棚が倒れてガラスが割れる音があちこちで鳴り響き、天井からは蛍光灯が次々と落下し、コンクリートにたたきつけられて破裂するように割れる。こんな地獄のような地震はもちろん初めてだ。必死に落ち着け落ち着けと自分に言い聞かせた。地震マニュアル通りにテーブルの下に隠れたりしないで、すぐに外へ逃げればよかったと後悔したが、今さらどうしようもない。恐る恐る周りに目をやると、壁板は今にも裂けそうに大きく波打ち、太い鉄柱が自分に襲い掛かって来るように見える。その時、私が身を隠しているテーブルの後側を、何か巨大なものがドーンという音をたてて直撃した。この衝撃で私が掴んでいた2本の脚は奪い取られるように手から離れてテーブルは後方にひっくり返った。巨大なものはすぐ背後の高い梁に掲げられていた3畳ほどもある金華山黄金山神社の大掲額だった。もしも反対向きに隠れていたら、頭を打ちつけられて死にかねない所だった。

もう身を守るものがなくなった。その瞬間、岩手・宮城内陸地震(2008年)の時に仙台市のスポーツ施設「スポパーク松森」で天井が落ちて26人が負傷した事故と、震災の20日ほど前に多数の

死者を出したニュージーランドの地震が頭に浮かんだ。思わずこの建物も崩壊するという恐怖が走った。本能的に体が動いた。縦に三つ並んだテーブルの下を夢中で這いながら出口に向かい、リュックで頭を守って全速力で外へ飛び出した。建物から十歩ほど離れた時、一瞬死の恐怖から解放された。これが最初の命拾いである。

だがその時目に入ったのは、我々が乗るはずの船が猛スピードで沖へ走り去ってゆく姿だった。津波を避けるためだから仕方ないか、と思いながらも見捨てられた孤独感と大きな不安を感じた。後方を振り返って山側を見ると何人かの仲間の姿が目に入った。一瞬安堵したがそれどころではない。目の前の崖からは、土砂と共に岩や松の木がもみくちゃになりながら次々に落下して来る。山腹にいた鹿たちがそれを避けながらさらに上へ上へと駆け上がって行く。黄金山神社の上り口では赤い大鳥居が倒れんばかりに大きく揺れ、石燈籠や石柱がことごとく崩落してゆく。この光景が永久に続くのではないか、そして金華山全体が崩れ去ってしまうのではないかとさえ思った。まるで非現実の世界に身を置いているようだった。その時には思考力を失い、恐怖や生死などというたかが人間が持ち合わせているちっぽけな感覚はとっくに乗り越えていたように思う。誰ひとりとして声を発するものはいなかった。永久に続くかと思われた猛烈な揺れもさすがに峠を越し、次第に現実の世界に引き戻された。

2. 崖崩れ最中の津波避難

すぐに頭をよぎったのは津波だ。海面がぐんぐんと下がって行き、砂が見えてきた。誰からともなく、「津波が来る。逃げなくちゃ！」という声が上がった。黄金山神社方面の高台へ上るのが最善だが、崖崩れがまだ続いている。しかも上り口付近の道は大岩や木で埋まり所々で半分ほど崩落している。躊躇せざるを得ない。これまで宮城県内では震度5～6の地震が何度か起きていたが、せいぜい1、2メートルほどの津波だったので、待合室の屋根が隣のお土産屋の2階へ上ることも一瞬頭に浮かんだ。しかし、その直後、防災無線のスピーカーから「6m以上の津波が来ます。全員高台に避難してください！」という放送が鳴り響いた。これで我々の行動意志が決定した。今思うと、この放送は命の恩人と言ってもよいだろう。危険を覚悟で一斉に高台を目指して上り始めた。右側の崖からの落石をかわし、海に転落しないように注意しつつ、倒れた木や岩を乗り越えてひたすら上った。途中で何度も余震が起り、そのたびに岩がごろごろ落ちてくる。私自身はこれまで、生活や旅の中で死と向き合うような危険に4度遭遇している。そのため比較的冷静だった。このような歴史的大地震の実態を記録に残しておかなければならない。これが現場に遭遇した作家の使命だという意識が働き、危険を冒しながらも頻繁にシャッターを押した。撮影のお陰で命拾いした瞬間があった。振り返りながら後方を撮影し、再び前方に向き直った瞬間、前方10m程に亘って大岩が落下してきた。思わず体は硬直し、目は見開いたままだった。撮影せずに歩いていたら確実に直撃されていたにちがいない。数えてみるとその数7個、私の直前に落ちた岩は直径2mもある大物だった。これが2度目の命拾いだった。

5、6分ほど上った時点で、船が再び棧橋方向へ向かって戻り始めた。スピーカーで「乗

る人は急いでくださーい！」と叫んでいる。我々もいったん坂を下り始めたが、方針通りこのまま上り続けることになった。それを見た船は再び沖へ方向を変えて猛スピードで逃げ去った。後から聞くと、その船には地震前から棧橋に出ていた2人の仲間が乗っていたとのことだ。

完全に退路が絶たれた状態でひたすら上る。途中で小さな余震が何度も起こり、そのたびごとに岩や石が落ちてくる。再び大きな地震が起これば、まちがいなく岩の下敷きになるか海へ転落するだろう　　そう思うと生きた心地がしない。神に祈る気持で上り続けた。上ること20分、3時15分によやく標高50メートルほどの高台にたどり着いた。まさに「命がけの避難」だった。到着したときは安堵感のあまり気が抜けてしまった。

3. 大津波襲来

だがほっとしはいられなかった。すでに海はどす黒く、波が異常に高くなり始めていた。案の定3分後の3時18分、第1波が襲来した。防波堤が隠れ、海面から7メートルほどある待合所の屋根、さらには10mほどあるお土産屋の屋根も次々に水面下に消えていった。それを見た時は、命がけでここまで上って来て本当に良かったと思った。約10分後の3時29分、今度は水が急激に南北両方向に引き始め、1分もたたないうちに建物や棧橋が完全にもとの姿を現した。そして33分には金華山と牡鹿半島との間の金華山瀬戸からはほとんど水が引き、壮大な枯れ河のようになった。

それも束の間1分後、3時35分には30mほどもあろうと思われる第2波が南北両方向から怒涛のように押し寄せた。南方向の太平洋側(鮎川側)からの津波は鳥が翼を広げたように形で中央部分がややくぼんだ形をしており、それに対して北側(女川側)からの津波は中央部分がやや突き出たよう形をしていた。2つの黒い津波は狭い金華山瀬戸に入ると次第に高さと速度を増し、北からの津波が南からの津波に食い込むようにして中央付近から次々に激突した。それが急速にせり上がって数十メートルに巨大化してゆく。そしてこともあろうに、超巨大津波が我々のいる50m以上の高台を目掛けて押し寄せてきた。もう撮影どころではない。地震がけ崩れの危険から逃げおおせて来て、ここで津波にやられたのでは元も子もない。さらに高いところまで必死に駆け上がって難を逃れた。そして徐々に引いてゆく波を見ながらやっと自分たちは助かったのだと漠然と感じた。結局、地震、がけ崩れ、大津波で命を落としかねない場面が3度あったことになる。だがこの時、我々を襲った津波が、同時に向かい側の鮎川を壊滅状態にし、さらには三陸以外の土地まで襲って死者と行方不明者を2万人近く出していることまでは到底思いが及ばなかった。